

たえこが越えた

松田妙子

先月号に私が書いたA・Kさん、誰のことなのかはバレバレですね。ファンの方、すみませんでした。さてそのルナホールでの集会当日。私が紙芝居とトークをやって退場した後、A・Kさんが登場。私は客席で見えていたのですが、それまで心にあったわだかまりが、急速に薄れゆくを感じました。それまでは、「A・KさんはA・Kさん、あなたはあなたでしょ」と人に言われても、何だか納得できなかったのです。それが、客席から舞台上でライトを浴びているA・Kさんを見上げてみると、「この人と私とは全然別の人。歪んだ鏡なんかじゃなく、A・KさんはA・Kさん、私は私なんだ」って、素直に思えたのです。

それまでは、私はA・Kさんに自分の居場所を奪われるような不安を感じていたのです。それは私に、自分より年下の人に嫉妬する心ぐせがあるからです。私が二才の時生まれた弟に、親の愛も何もかも奪われてしまった、というトラウマが原点です。私は齡二年にして、「私はもう年を取りすぎてしまった。後から来る者に何もかも奪われるのだ」と思いこみ、それをずっと引きずって何十年も生きてきたのです。

A・Kさんに「自分と同じ種類の人間」の臭いをかぎつけければ、その嫉妬はよけい高まります。同じように「生きづらさ」を抱え、試行錯誤してきても、彼女のやることの方がずっと派手で人目を引く、私が長年の苦闘の末、



ようやく社会運動の場で「表現者」として自分の居場所を確保したと思ったら、A・Kさんは同じフィールドで同じ「表現者」として、私を遥かに凌駕する活躍をしている。私の居場所なんか簡単に侵食されてしまう……と感じたのです。

それが、いざルナホールの客席から本物のA・Kさんを見上げてみると、「この人と私とは全然別次元の人。変な競争心など起こす必要はない」と感じられたのです。その前に自分の出番をすませ、私は私なりに力一杯やった、という満足感を得られたのが良かったのでしよう。舞台上の私に、客席から由美子さんや葦妙子さんから、素晴らしき花束や贈り物が手渡されたのも良かったです。私には私の役割があり、私の人間関係がある。それは決してA・Kさんにテリトリーを侵されるようなものではないんだ、と思うことができたのです。

初めて真近に見るA・Kさんは、私より二十才も若いだけあって、若い女性らしい華やきがありました。年配者の多いこの会ではマドンナ扱いでしたが、実際、私の態度もアイドルタレントを取り巻くミーハーそのものでした。直接A・Kさんに話しかける勇氣はなく、やっと言えたのは、「一緒に写真を撮って下さい」と、「握手して下さい」の二言だけでしたもん！

帰宅して、由美子さんに頂いた見事な花束をありあわせの瓶に生けてみて、ふと二十数年前のことを思い出しました。病院に入院していた私の所へ、ある晩両親が、大きな花束を持って訪れました。父の退職記念パーティーの帰途に、立ち寄ってくれたのです。関係者からの父への慰労の花束は、そのまま私への見舞いの花束になりましたが、私は別に感激もしませんでした。当時の私は自分のことで頭が一杯で、長年勤め上げた職を辞す父の胸中や、それを支え続けた母の心に思いをいたすこともなかったのです。そ

のことが今、胸に痛い。だから私は、今回頂いた花束を、母の仏前に供えました。父にも母にも見てもらいたかったから。

A・Kさんが二十五才の時著した自伝に、こういうくだりがあります。中学時代、不登校になった彼女を、両親は何とか学校へ行かせようと骨を折る。それについてA・Kさんは、「親は世間体と体裁しか考えていなかった」と書いています。私は、ああこの人はまだとても若いのだ、と思いました。若い頃は、親世代のことをそんな風にしか見られなかったりするものだ。でも今の私なら、親は親なりに、我が子のために良かれと思って必死だったんだということがわかる、と。とにかくこの「自伝」は、私にはとても辛かったです。自分が自分にしてきたことや、親にしてきたことを思い出すから。

3・11の重さに負けない、「ほあんいんぜんいんあほ」の回文のような傑作を生み出す庶民のユーモア感覚にあやかって、私も回文を考えてみました。大飯原発再稼働に怒って、「おおいかりのりかいいおお」「おおいやめやいおお」。被災瓦礫の広域処理問題に切れて「ガレキでキレが」いつまでも平和にならなくて「くらいイラク」。——いやはや、私みたいなバカでなければ考えないような下らないダジャレです。A・Kさんなら多分、こんなバカバカしいことは考えないだろうと思うと、私も「A・Kさん病」を越えつつあるのかな、思います。「たえこがこえた」。妙子が越えた。何を？もしかしたら仏様しかご存知ないようなことを、いつの日か。

2012、6、24、9：30AM*

